

学校づくりの一員として

one of them 4

続々日々の雑記帳 No.46 2007. 1. 15 by yoshiki

言葉を映像化する力

木曜日の放課後、保護者のFさんから電話。五年生では三学期の算数を少人数授業で行うにあたりグループ分けの基礎資料としてレディネステストを実施されました。その文章題がほとんどできていなかったことがショックだったようです。

「計算はできても、読めないんですね。「かさ」なんて、ひだん使っている言葉なんだけど、子どもは知らない。何を聞かれてるか分からないから適当に数字を並べて式にしてしまおう。算数だけでなく、もつと国語の方にも力を入れてもらいたいですね。」といった話でした。

Fさんの言われるのは全くそのとおりです。でも、文章題を読み解く国語力はどうすれば育つのでしょうか。

そのことを課題として考えた記録が私の手元に残っています。ずっと前、三年生を担任していたときのものです。

■文章題が読めない子どもたち

2mのリボンを、同じ長さに4つに切って、それぞれをまた同じ長さに2つに切りました。もとのリボンをいくつに切ったことになりますか。

算数のテストをした時のことである。こんな問題があった。

出された答案を見て驚いた。ほとんどの子ができていないのである。

答で一番多かったのが6本。あとはでたらめな数字が書いてあるか、空欄のままだった。

この問題で問われている作業は全く単純である。目の前で実演して見せたら、幼稚園の子だって正解を出せただろう。しかし文章題になったとたん大変な難問になってしまったのである。どこが読めなかったのか。「それそれを」が読めなかったのである。「それが何をさしているかが読めないために、「また2つに切った」と

短絡させて、6本と答えてしまったのだ。

しかし、私は、指示語が読めなかったといふこと以前にもっと基本的な問題があるように思った。それは、この文章を具体的な作業場面を浮かべて読んでいないのではないかということだ。リボンの絵を浮かべ、4つに切る場面を浮かべ、と映像化しながら読んでいけば、「それぞれ」の意味も類推できたのではないかと思うのである。事実、後で子どもたちと復習したとき、線分図で4つに切ったところまで書き、「『それぞれを』で何のこと？」と尋ねたら、多くの子が正しく答えられたのである。

ここにあげた文章題でのつまずきのようなどとは、他の理科や社会などでもよく起こる問題で

はじめに、アリのすから少しはなれた所に、一つまみのさとうをおきました。

しばらくすると、一匹のさとうが、そのさとうを見つけた。これは、えさをさがすために外に出ていたはたらきアリです。

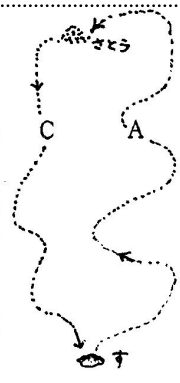
ありは、やがてすに戻っていきました。

すると、すの中から、たくさんのはたらきアリが、次々と出てきました。そして、列を作つてさとうの所まで行きました。

ところが、ふしぎなことに、その行列は、はじめのあたりがすに帰るときに通つた道すじから外れていないのです。

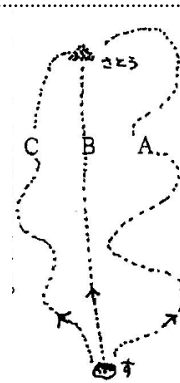
次に、この道すじに大きな石をおいて、ありの行く手をさえぎってみました。

*はじめのアリの動き



*あとから出てきた、たくさんのはたらきアリは、どこを通つたのでしょうか。

*AかBかCか...?



「大きな石」をどこにおいたのでしょうか。図で考えましょう。



ある。それだけに、国語の学習の中で、言葉を具体的な映像と結んで理解するという読みの姿勢を確立させることが重要な課題だと思つたのである。

そんなことが頭にあり、「ありの行列」という説明

文で右図のよつな手引きを使って学習した。概括的に文章を捉えることよりも、一文・一語を具体的な映像と結んで読む力をしていねいに育てたいという思いからである。